
If...戦争が終わったら

クノウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If…戦争が終わったら

【Nコード】

N1315A

【作者名】

クノウ

【あらすじ】

このシリーズはラブラブな2人のお話……のはずですジャンルとしてはドタバタラブコメ？

受験生編

ある土曜日の放課後――

「シユウちゃん、お待たせ〜。」「ああ、やっと来たんか。じゃあ行くか。」「うん!」

「それにしても長かったな、進路相談。」

「うん……、今のままじゃちょっと厳しいって言われて……」

「そ……そうか……。」「ねえ、シユウちゃん。」「ん?」

「やっぱり私……自衛隊に行ったほうがいいのか?」

「なに言ってるんだ!!」「『ポカツ!』『イタツ!?……シユ、シユウ……ちゃん?」

「もう戦争は終わったんだ。ちせが自衛隊に縛られる理由もないんだ!!」「うん。」

「それにな……。」「それに?」

「一緒の大学に行って、い……いっ……」シユウジの顔が赤くなる

「い?」「いっ……一緒に暮らそうって約束しただろうが!!」「

あっ!う、うん!!!」

何とか戦争が終わったこの世界は、戦争によって深い傷跡を残しながらも徐々に復興を始めていた。

そして俺たちは、細々と活動を始めた幾つかの大学の一つに“2人で”行くことに決めていた。

「さ、腹も減ったしどつかで飯食ってその後は……買い物でも行くか?」

「うん。でも、シユウちゃんって凄いなあ。」「ん?なにがだ?」

「だって私、シユウちゃんが国立目指せるほど頭がイイって知らなかったんだもん。私なんか今狙ってる大学にも行けそうにもないから……」

「ばーか。だからこそ俺がいつも勉強見てやってるんじゃないか。同じ大学に行きたくねえのか?」

「うつん！行きたい！！」

「よし、じゃあ買物物はキャンセルで、これから飯食ったら俺んちで勉強会だ！」

「えゝ！？」「明日の日曜はデートしてやるから、今日ぐらい頑張つて夜まで勉強しろ。」

「デート！？本当に？あつ、でも……」「でも？」

「それって、今日はシュウちゃんの家で夜まで2人つきりつてことかな？」（グハアッ！！）

そう、シュウジの両親は仕事の都合で帰ってくるのは、いつも夜になつてからだつた

「い、いや……別にだな……その……あの……」

俺はしどろもどろになる。ちせも顔が真っ赤だ。

そのとき、『ドガッ！』何かが飛んできて、頭にぶつかった

「痛つてゝ」足元を見てみるとそこには、皮靴が……

さらに後ろを見ると……

「バカシュウジ！！こんなところで、ちせにセクハラしてんじやないよ！！！」

アケミだつた……

「誰もセクハラなんかしてねえ！！大体後ろから革靴なんか投げんじやねえよ！痛いし危ないだろ！？」

「フツ…このあたしがこのくらいの距離で外すはずないでしょ。それに、革靴じゃなくてこつちを投げて欲しかったのかしら？」

そうつて取り出したのは……辞書。

しかも分厚そうなの……

「すいませんでした。」「よろしい。」「俺が一体何をしたんだ？」

「で、ちせ。こいつに何をされたの？あんな事やこんな事をされそうになつた？もしかして拉致監禁されそうになつたとか？」

「誰がするか！！」「アケミゝ、シュウちゃんはそんな事しないよゝ。」「

「分かつてるわよ、こいつにそんな事のできる度胸なんかあるはず

ないでしょ？冗談よ、冗談。」

冗談とはいえ、外でそんなこと言つな……

「で、本当は何の話してたの？2人とも顔真つ赤だったけど。」

嫌な含み笑いで聞いてくるアケミ……

「別に何でもねえよ！な、ちせ。」「うん。ただ今日は一緒に勉強しようって話してただけだよ。」

「へー、じゃああたしも一緒にしてもよろしいかしら？シュ・ウ・ジ・ク・ン。」

（こいつは何を言っているんだ？

せつかく俺が、何気ないふりをしてちせを家に誘うことに成功したっていうのに……

これじゃあ、【ちせに勉強を教えながらイチヤイチャしちゃうぞ大作戦】が遂行できない！！）

シュウジの頭は、さつきからそのことで一杯だった。

受験生とはいえ所詮男はこんなもの……

「そつだぞ、シュウジ！」

後ろから声がする

「俺たちにも勉強を教えろ！！」

アツシにタケ、ノリ……？

「お前ら、何しに来た！？」

「何って、俺はアケミの彼氏だし、アケミが行くんなら俺も一緒に教えてもらおっかな」と。

とアツシが

「俺たちは、今度のテストで赤点を取るわけにはいかねんだよ、親友だろ？シュウジ。」

と訴えるタケとノリ……

つまりこの2人は、いわゆる『落ちこぼれ組み』という奴だ

「そんな俺の知ったこつちゃねえ！俺にだって“都合”という物があるんだ。教えて欲しけりゃまた今度にしろ！！」

俺がそう叫ぶと、アケミが

「あらら？なによムキになっちゃって。本当はちせと二人っきりになるのを邪魔されたくないだけなんでしょ？」

俺の心を見透かしたようなツツコミを……

「そ、そうか……悪かったなシュウジ。じゃあ今日のところは、俺もアケミと『二人』で仲良く勉強するわ。」

「も…もう、アツシったら……」アケミが照れる。

しかしなぜアツシは、『二人』のところを強調するんだ？

「ううううう~~~~~、タケ~~~~~！！！」

「ああ、ノリ~~~~~！！！」

「俺たちも彼女が欲しい~~~~~！！！」
こういうことが……

ようやくみんなと別れた俺とちせは、商店街で昼食を済ませて俺の家へと向かった

「ただいま。」「お…おじゃまします。」

ちせが家に来るのは初めてではないのだが、やはり二人きりという状況はどうにも緊張してしまう…

「じゃあ、飲み物でも持つてくるからちよつと待ってるよ。」

「うん。」そう言ったちせは、俺の部屋をきよきよと見回している

「な、なんか面白いもんでもあったか？」

「え！？ううん。ただ、シュウちゃんの部屋ってなんだかいいなあ
って思ってた……」

「そうか？別に豪華でもなんでもないぞ？」

「そうじゃなくて、やっぱり普通は男の子の部屋って緊張しちゃう
んだけど、シュウちゃんの部屋って落ちついて安心するんだ。なん
だかシュウちゃんに守られてるって感じがして。」

「そつ、そうなのか？」

平静を装ってみるが、かなり恥ずかしい事を言われているせいで、
今にも転げ回りそうだ。

それから二人は、ちせの苦手な教科を中心に勉強した。
それはまるで先生と生徒のように……

時には厳しく、時には優しく、なるべく分かりやすく、
二人寄り添って……

そこにはいつしか、二人の世界が出来上がっていた。

それこそいい雰囲気になるくらい……

近づく肩と肩。愛しい人を見上げる小さな瞳。顔にかかる吐息。
相手の心臓の音さえ聞こえてくるようだ。

抱き寄せる肩……

近づく唇同士……

あと数センチ………

その時

『キッツ!』

後ろのドアが動く音がした

振り返るとそこには……

「あらあら、ごめんなさい。私に構わず続けていいのよ？」

「かつ、母ちゃん!？」「おばさん!？」

それこそ、親が帰ってきていることにも気付かないくらい、二人の
世界は出来上がっていた。

「母ちゃん、今日も遅くなるんじゃないのかよ!!」

「ふふつ。ちよつと忘れた荷物を取りに帰ってきたのよ。そしたら、
玄関に靴が二つあるから……

ねえ?」

「『ねえ』と言われても……」

「うっっ」

ちせにいたっては、あまりの恥ずかしさに茹でタコ状態だ

「だからって、勝手に人の部屋を覗くなよ!!」

「あら?ちゃんとノックしたんだけど……気付かなかった?」
嘘だ。

嘘に間違いない。

いくら俺たちが二人の世界に入っていたとしても、ノックの音に気がつかないはずがない。

そもそも母ちゃんは、女の子が欲しかったということもあり、やけにちせの事を気に入っている

俺の初めての彼女という事もあり、それこそ実の娘のような可愛がりようだ

「お、おばさん、私、今日はもう帰ります!」

時間はもう夕方、勉強も一通り終わっていたので、ちせは遅くなる前に帰ろうとしていたが

「あら、ちせちゃん。私のことは『お義母さん』って呼んでっいてるでしょ?それに、そろそろ夕食の用意もしないといけないから、家で食べていけない?」

「えええっ!!」「母ちゃん、まだ仕事が残ってるんじゃないのかよ。」

「大丈夫よ、お父さんが私の分まで働いてくれるから。」
哀れ、父ちゃん。

「いいわよね、ちせちゃん?」

(どっ、どうしよう、シュウちゃん?)

(うーん、どうしようたって食べていけばいいんじゃないか?母ちゃんもあぁいってることだし、俺ももう少しちせと一緒にいたいかな。)

(シュウちゃん…… 『ポッ』)

俺とひそひそ話をし、頬を染めるちせを見て

「あらあら、二人とも今晚の予定でも立ててるんですか?」

「してねえよ(ません)」「」

というか、それってちせが家に泊まっていくってことか?

と、まあ色々あったが、結局ちせは家で夕飯を食べていくことになった

『トントントン』『コトコトコトツ』『ジャー』
今キッチンには、母ちゃんとちせの二人が、仲良く料理をしている。
なんだかんだと言って、ちせも俺に晩飯を作りたかったようで、母
ちゃんの

「将来の予行練習でもしませんか？」

という魔性の言葉にのせられ、二人で料理を始めたのだ。

そんな事を言う俺も、実のところはその光景を見て（いいなあ……）
なんて思っていたりする

（ちせがこうして、俺のために毎日料理を作ってくれる……ちせ
の料理は、たまに作ってくる弁当しか食ったことがないが、なか
か美味い。それに、あのエプロン姿……あれを毎日見れる……
しかも俺だけの物……）

俺は、将来のちせとの新婚生活を夢見ていたりした。

しばらくして、

「シュウちゃん、ご飯できたよ。」

「シュウジ、ほんとイイ子つけたわね。ちせちゃんてお料理上手
なんですもの。」

「いいえ、お義母さん程じゃないですよ」

二人はすでに、実の親子のようだ

そして三人での夕飯が始まった

「どうかな、シュウちゃん？」

俺は、ちせの作った煮物を食べてみる

『モグモグモグ……ゴクンッ』

「……………」「ま、まあ、なかなか美味しいぞ。」

顔を近づけてくるちせに圧倒され、なんとかそれだけ口にした

「あらあら、シュウジがそんなに素直に褒めるなんて、ほんとに美
味いのね。やっぱり“愛情”が最高の調味料かしら？」

「「えっ!？」」 とつても恥ずかしかった

それから一時間ほどして、食事の片付けも終わりそろそろちせが帰

る時間になった

「じゃあ、今日はありがとうございました。」

「ちせちゃん、本当に泊まっていかなかったでもいいの？」

「いつ、いえ、これ以上は両親も心配しますので……」

「あら、そう？じゃあ残念ねえ。」

母ちゃんの顔は本当に残念そうだった

「ちせ、暗いからそこまで送って行ってやるよ。」「ありがとう、シュウちゃん。」

「ふふっ、シュウジもなかなかやるわね。送り狼にならないように気をつけてね」

「ならねえよ！」「シュウちゃん……私なら……（ポツ）」

「ちせも、そこでマジで答えるな！！」

そんな期待するような顔をされたら、本当に送り狼になってしまっ
じやないか！！

「ほらちせ、もう遅いんだからさっさと行くぞ！！」

「あ、シュウちゃん待ってよ」

「ふふっ、シュウジも照れちゃって。ちせちゃん、また来てね。」

「あ、はい！また来ます。さようなら。」

ちせはシュウジを追って駆けて行く

「早く孫の顔が見たいわねえ……」

遠ざかる二人の背を見ながら、そうつぶやいていた

「ねえ、シュウちゃん。」「なんだ？」

「お義母さんって、とつても優しいね？」「ああ、ちせのことを大
分気に入ってるからな。」

それにしても、呼び方がもう『お義母さん』で定着している。嬉し
いような怖いような……

「……………」

しばらく無言が続く……

「そっだ、ちせ。今日は勉強頑張ったんだから、明日は約束通りデ
ートしようぜ。」

「そうだった！！明日は何処に行くの？」「うん、ちせは何処に行きたい？」

「私？私は……水族館！」「あの水族館か……、よし、行くか！」

「やったー！ありがとう、シュウちゃん！」「うわっ！？」

ちせが抱きついてきて、思わずバランスが崩れ転んでしまった

「あっ……」「……………」（ポツ）

自然と、お互いを向き合う形になった……

……………

時間は流れ、冬も終わりのころ

「シュウちゃん、やったよ！！合格だよ！！」

「ああ、やったなちせ。おめでとう。」

「いっぱい勉強したもん。」

「そうだな。これで、やっと二人で暮らせるな。」

「うん！！」

大学の合格を祝う二人の姿があった

同棲編

「ただいま」。「あつ、シユウちゃんお帰り。バイトどうだった？」
「ん？まあいつも通りかな……とりあえず腹減った……飯で
けるか？」

「あつ、もう少しだからちよつと待っててね？疲れてるならお風呂
も沸いてるよ、先に入っちゃう？」

「ああ……、そうするよ……」。「もう、答えるだけで精一杯だった
「シユウちゃん、そんなにバイト詰めなくてもいいんでないかな？
こここのところ毎日こうでしょや。」

「い、いや。俺は大丈夫だって……、風呂……入ってくる。」。「うん
……」。

今は12月も半ば過ぎ。俺とちせが大学に合格し同棲を始めてもう
すぐ四年が経つ。

今まで何とかやってきたが、ここまでこぎつけるのは本当に大変だ
った……

そこにはこんな経緯があつたからだ

回想

「ちせとの同棲を認めてください！！」

俺は大学に合格して数日後、ちせと一緒にちせの家に訪れていた。
もちろん同棲の許可を得るためだ

「……」。」「あの……」。「……」。」「……」。」「……」。
「……、最高に気まずい……」。

「……」。」「ちせのお父さんは一言も話さない
しばらくそんな雰囲気が続く。

「パパ？少しぐらい話を聞いてあげたらどうですか？」
その沈黙を破つたのはちせの母さんだった。

「うるさいっ！！母さんは口出しするな！！」

「でも、パパ……」

「うるさいと言っておるだろうが！！母さんには関係ない！！」
ピシッ！！

空間に亀裂が走るというのはこういう事を言うのだろうか？

まさにそんな表現が当てはまる雰囲気だった。

「パパ……？は・な・し、聞いてあげるわよね？それとも“アレ”
が食べたいのかしら？」

「ハッハイイイイ——、聞きます聞いてあげます！！」
なんだ？“アレ”ってなんだ？そんなにヤバイのか？

だが、まあ“アレ”のことは置いてとりあえず話を進めよう
(本当はかなり気になるのだが、身の危険を感じる……)

「ちせとの同棲を許して欲しいんですが……」

「ダメだダメだ！！貴様のような奴と同棲だと！？ワシは認めんぞ
！！」

頭ごなしに拒否された。すると

「パパ？何も頭ごなしに否定しなくても。それにいいじゃないです
か、ちせももうお年頃なんですし。」

またちせのお母さんだった

「うるさい！！こんなろくでもなさそうな奴にちせを任せられん！
母さんこそなんでこんな奴の肩を持つ！！はっ！？」

さてはコイツに既に丸め込まれたのか？そうなのか？そんなんだな
！？

この人は、何処まで妄想すれば気が済むんだ？

俺がそんな事を考えていたその時だった。再び“ピシッ！！”
そんな音が聞こえた………気がした

まるで空気が凍りついたような、そんな感じた。

おばさんの手にはいつの間にかオレンジ色の“何か”が入った瓶が
………

「パパ……？そんなに“これ”が食べたいようですね……？」

まぶしい程の笑顔…… だけどそこにいるのはまさに“鬼”だった
「うわあああああつー!!」
引きずられていくちせのお父さん……

合掌

しばらくして現れたのは……
優しそうな顔をしたちせのお母さんと、……… (うわっ) ……
… 見るも無残な顔をしたちせのお父さんだった

。 あの瓶の中身はなんだったのだろう……

「シュウジクンダッタネ？」

「は…はい。」

「チセヲカナシマセタリハシナイトチカエルカイ？」

「もちろんですー!!」

「ナラ、フタリデクラスノヨミトメヨウ。」

「あ、ありがとうございますー!!」

口調がさつきからおかしいのは、この際気にしないことにした。

「やったな、ちせ。」

「うん、シュウちゃんよかったね。」

「シュウジ君。ちせをよろしくね？」

「あ、はい！こちらこそよろしく願います、おばさん。」

「あつー!？」

「ん？どうしたちせ。」

「な、なんでもない……」

「あら？シュウジ君、私のことは“お義母さん”と呼んでいいのよ。」

どっかで聞いた台詞だった

“ドタドタドタツ” 二階から誰かが降りてくる

「母ちゃん、話し終わってた？」

それは、ちせの弟のカズヤ君だった。

「よう、兄ちゃん。話は終わった？」

「ああ、終わったよ。」

「で、結果は？」

俺は無言で親指を立てて突き出した

「やったね、兄ちゃん。まあ、こんな頼りない姉だけどよろしく頼むよ。」

「ああ、分かってるって。」

「もう、カズ！」

「はははっ。」

ここで、何故俺とカズヤが仲がいいかお教えしよう

大学合格が決まって次の日曜日、俺たちは合格祝いに久しぶりにデートしていた。

デートと言っても、今の状態じゃ他の街に行けるわけもないので近くの商店街での買い物だった。

そして、そこで出会ってしまったのがちせの弟のカズヤだった。

奥手なちせの初めての彼氏。しかも、兼ねてより兄が欲しかったと言ったこともあり、すんなりと仲良くなってしまったのだ。

色々とおごらされたり二人の関係を散々聞かれたりしたのだが……

まあ、そんなこんなで夜も遅くなり、そして帰り際

「あつ、シュウジ君。これ持って行って？」

「なんですか？これ。」

「ふふっ、私の高校時代の親友から教わったジャムよ。よかったらお家の皆さんで食べてね？」

「あつ、はい。ありがとうございます。」

渡された瓶の中身はオレンジ色の何かだった…… 当然俺は、帰る

途中のゴミ捨て場にそれを捨てていった。

〜長い回想終了

まあ、その後もたまにはあるが俺達の様子を見に、義父さんや義母さんがやってくるので色々大変だったのだ

「ふゝさっぱりした。」

「シュウちゃん、ご飯できてるよ」

「ん？ああ、わかったよ。」

「「いただきます。」」

.....

今日はいつも以上に言葉が少ない 「ねえ、シュウちゃん。今日のご飯美味しいかな？」

「ああ、いつもちせの料理は美味いぞ。この煮物とかよくできてるじゃないか。」

「それね、この間お義母さんに教わったんだ。シュウちゃんはこれが好きって言うてたから。」

そう言うて、モジモジと赤くなるちせ、

ああっ！可愛いじゃねえか！！

そうして夕食も終わり、疲れていた俺はさっさと寝てしまった

〓次の日〓

今日の俺とちせは、別々の講義だったので俺は先に大学に行ったら、途中見知った顔に会った。

「よう、シュウジ。久しぶりだな。」

「アツシ、どうしたこんなところで？」

「ん？まゝいいじゃねえか、そんなこと……」

アツシとアケミも、俺たちと同じ様に大学とまでは行かないが専門学校に通い、二人とも既に卒業している。

そのアツシが俺のところに来るとは、きっと何かあるだろう。

「今時間あるか？」

「少しなら大丈夫だ。」

「じゃあさ、聞いてくれよ。俺さ、」

「止めとけ!!」

「まだ言ってねえだろ!!」

「いや、話を聞いても結局はそう言うだろうと思ってさ。」

「せめて話を聞いてからにしてくれよ……」

「ちよつとからかいすぎたか」

「で、話って何だ？」

「俺、この間アケミにプロポーズした。」

「……………は？」

「だから、プロポーズした。」

「ふ〜ん…で、いつ式を挙げるんだ？」

「驚かないのかよ？」

「いや、実はもう知ってる。」

「何だよ!？」

「この間、アケミが泣きながら突然押しかけてきてな。まあ事情を聞いたらプロポーズされて嬉しさのあまりここに来てしまったと…。」

「

「はあ〜俺から伝えたかったのによ。」

「いいじゃねえか。おめでとうアツシ!」

「おう!」

「そういえば、タケとノリには教えたのか? 教えたら何言われるかわからねえけど。」

「まだだけど、きっと大丈夫だろ?」

「何でだ?」

「ああ、最近知ったことなんだが、タケとノリの奴にも彼女ができたらしい……」

「マジか!？」

「ああ。ただな……」

「ん?」

そのおかげで、目標額を達成することができた

「ただいま。」

「あつ、お帰りシユウちゃん。今日も遅かったね。」

「ああ。でも明日はバイトも無いから午後からは一緒に過ごせるぜ。どこに行きたい？」

「午前中は用事があるの？」

「ん？あ…まあ、人と会う約束してて、どうしても外せないんだ。」
上手く誤魔化せただろうか？

「うゝん、じゃあ仕方ないね。でも、夜は…その…一緒に…。」

「クリスマスイブ、一緒に過ごそうな、ちせ。」

「うゝ、うん！」

次の日

「ありがとうございます！」

見送りの言葉を背に店を出る。今日は絶好のデート日和とでも言うぐらい、空は晴れ渡っている

「喜んでくれると、いいんだけどな…」

手の中の箱に向かって呟く

意外と早く買い物が済んでしまったので、俺は散歩がてら街を物色していた

といつても、たいして大きな街じゃないし、もう見慣れた街だ。

すぐに別の場所に移動した

小さな公園。仲の良さそうな子供達が遊んでいる。

そこに似つかわしくない大人が二人…

「今更俺達に何の用ですか？」

「私は、あの時君に『仕方がない』と言いました。でも、仕方がなくなんか無かったんです。すべては我々が悪かったんです。私も最近知らされました。あの戦争の始まった理由、教えましょうか？」

「そんなの、知りたくも無い。自分達の罪を認めて、それで、あんな等の罪は許されるのかよ？」

「許されるとは思っていません。でも、償いはできます。この地球^{ほし}に、そしてちせさんにも。」

「そんなのあんた等の自己満足に過ぎないだろ！勝手に戦争はじめて勝手に体を改造して、ちせがどれだけ苦しんだか分かっているのか！！」

「分かりません。ちせさんの苦しみは誰にも分かりません。もちろんあなたにも。」

「ウツ……」

「でも、支えてあげることができます。それは、あなたにしかできない。」

「え？」

「我々では、ちせさんに償おうとしても何も償うことはできません。ただ、遠くから見守ってあげるだけです。」

その時が来るまで……」

「え？おい、その時って何だよ？」

「その時がくれば分かります。我々は、ちせさんが望んでいることなら、少しでもお役に立ちたいと思っています。あなたが我々を憎んでいても、それだけは忘れないでください。いつか我々の力が必要になるときが来ますから。」

カワハラは、まるで父親のような顔で言った

「これは、我々からの贈り物です。どうぞ使ってください。」

「これって……」

「今日はクリスマススイブです。恋人達に幸せ時間を……。」
そう言ってカワハラは去っていった

「あのおっさんもやるじゃねえか。」

少しだけカワハラを気に入ったシュウジだった

そしてお昼過ぎ

俺は約束通り、午後からはちせと一緒に過ごした。

カフェでお昼を食べ、人気の映画を見て、買い物をして、楽しい時間があったという間だった。

「暗くなってきたね、シュウちゃん。」

「ああ、冬だからな。」

なんとなく無愛想に答える。まあ、照れ隠しというやつだ。

「ねえ、シュウちゃん。そろそろお腹空かない？」

「ん……そうだな。じゃあ、行くか。」

「行くつて、どこへ？」

「ついて来れば分かるさ。」

そして俺たちは夜の街に歩き出した

「シュウちゃん、これって……」

「ああ……」

凄いのを知ってたけど、ここまで凄いと……

「よくこんなところの予約取れたね、シュウちゃん！」

「いや、まあそうだな……」

ここは、味良し、雰囲気良し、景色良しで、とても人気のあるレストランだ

しかも今日はクリスマスイブ。周りは家族連れやカップルばかり。何ヶ月も前から予約しなければ到底入ることすらできないだろう席に案内されると、すぐに料理が運ばれてきた

「あの、まだ何も頼んでないですけど？」

「いいんですよ。お二人の事はカワハラさんから最高のディナーにするよう頼まれています。」

「カワハラさんから？」

ちせは思いがけない人の名前が出て驚いた

「シュウちゃん……」

「ああ、このレストランはあのおっさんから招待されたんだ。」

「そうなんだ……」

「いいところあるよな、あのおっさんも。せつかくディナーなんだ。ほら、もつと楽しもうぜ。」
「うん。」

そして、素晴らしいディナーを楽しんだ俺達は店をあとにして、昨日二人で行こうと約束していた“あの場所”へ歩き出した

「美味しかったねえ、シュウちゃん。」

「ああ、おっさんに感謝しなきゃな。」

「ねえ、シュウちゃん。」

「ん？」

「昨日約束してた会う人ってカワハラさんだったの？」

「えっ！？あ、ああ…そうだ。」

店を出たところで出くわしただけとは言えないな。まあ、後をつけられてはいたのだろうけど。

「ちせには、償おうとしても何も償うことはできないって、そう言っ
てレストランの招待状をくれたんだ。」

「そっか…、カワハラさん元気そうだった？」

「ああ。」

「他に何か言ってたかな？」

「ん？別に…言ってなかったな。帰り際に『お幸せに』なんて言われてけどな。」

本当は気になることを言われたが、今は言うべきでない気がした
『そのときが来るまで…』 どういう意味なのだろう
しばらくして、目的地に着いた

「ここも変わらないな。」

「ちょっとひびとか入ってるけどね。」

「ああ。」

たしかに、所々ひびが入ったり欠けたりしている。

でも、ここは俺達の始まりの場所だ。それは変わらない。

「なあ、ちせ。ここで俺が言ったこと覚えてるか？」

「うん…。」

「俺達と子供と一緒に外に飯食べに行つて、帰りにここに来て付き合い始めたころ、少しだけエッチなことしたよなつて、話をする。」

「うん…。」

「あの頃はさ、まだまだ先のことだし、これからどうなるかなんてわかんなくてさ、今思うと正直ガキだったなつて思うよ。」

「うん…。」

「でもさ、俺…そんな夢を叶えたいんだ。」

ちせに抱きつく

え!？」

「ちせ、結婚…しよう。」

耳元で呟くように、はつきりと言った。

「結婚して、子供つくつて、家族でまたここに来たいんだ。」

「……………」

ちせは黙つたままだ。いや、泣いている…

「シュウ…ちゃん、嬉しいよー!!」

「お、おい？」

「シュウちゃん、シュウちゃん、シュウちゃん!!」

泣いているちせを支えつつ、ポケットからプレゼントを取り出し、左手の薬指にはめてやる。

「ちせ…幸せになろうな？」

「グスツ…ヒック…、うん。うん…。」

何度も何度も首を縦に振る

空からは、二人を祝福するように真っ白な雪が降っていた。

「ちせ、またここから始めような。」

「うん。幸せになろうね? シュウちゃん!!」

結婚編・前編・

とうとう最終章？

『ゴーン　ゴーン　ゴーン』

街の小さな教会で、今日、一組のカップルが結婚式を挙げていた

「シュウちゃん……」涙ぐんでいる新婦

「ちせ……」緊張のせいかガチガチに固まっている新郎

しかし二人の顔は幸せに満ちていた

「二人ともお幸せに〜」

「シュウジ、ちせちゃん泣かせるんじゃないぞ〜！」

「ちせ〜、おめでとう〜！」

親友達からの祝いの言葉がかけられる

「うう〜、ちせが……ワシのちせが〜」

「あらあら、お父さん。まだ子離れできないんですか？」

「そ、そうじゃないが……」

「今日は笑って送り出しましょうよ。」

「そうだぜ、父ちゃん。見苦しいぞ今更。義兄ちゃん、姉ちゃんのこと頼むぞ〜」

と、ちせの家族

「あんな可愛い子がシュウジの嫁に来てくれるなんて、シュウジは幸せ者だな、母さん。」

「ええ、そうですね。シュウジ、二人で幸せになるのよ〜」
シュウジの家族からも

ただどまあ何より驚いた（他のみんなも）のは、ちせの知り合いということに駆けつけて来た大勢の自衛隊の人たち、

特にテツ先輩とふゆみ先輩だった。

テツ先輩も、ちせに聞いていた彼氏が俺だという事を知ってとても驚いていた。

俺も、テツ先輩がちせの部下だという事を知って驚いたのだが。

「まさか、ちせの言ってた『シュウちゃん』がシュウジのことだったとはな。」

「俺だつて驚きましたよ。まさか先輩がちせの部下だったなんて。それにその赤ちゃん……」

「ん？ああ、俺とふゆみの子だ。どうだ！可愛いだろう？」

抱きかかえる赤ん坊を見るその顔は、まさに“親バカ！！”そのものだった

「シュウジ、結婚おめでとう。」

「あ、ふゆみ先輩。先輩こそ、ご出産おめでとうございます。」

「ふふつ、ありがとう。こんなバカ亭主の子でもやっぱり可愛いものね。」

そう言うふゆみ先輩の顔も、とても幸せそうだった。

「それにしても、テツとシュウジの嫁さんが知り合いだつてついうのには驚いたわね。どこで知り合ったのかしら？」

「そつ、それは……」そんなの教えられるはずがないって（汗その時

「ふゆみ〜！サクラ（二人の子供の名前）が泣き出した〜！！」

「あらあら、お腹でも空いちやったのかしら？頼りない亭主を持つと大変だわ。じゃあシュウジ、また後でね。」

「あ、はい。」 危なかったな…

会場となった教会では、招待された多くの人たちが二人の結婚を祝っている。

だが、その一角では……………

「うわー！ー！ーん！！」

「ああ、イク。もう諦めなさい。見たでしょ？あの二人のラブラブぶりは。」と親友をなだめるサトミ

「でも、でも……」

「はあ…重症だねこりゃ。」

いまだに初恋を引きずるイクであった…

（仕方ないか。あたしだって本当はまだ先輩のこと…）

そんな事を考えていると、二人を呼ぶ声が聞こえてくる

「おい、サトミ、イクちゃん、そんなところに居ないでこっちに来てみなよ。」

「ほら、お姉ちゃんが呼んでるから行くよ？泣くのはやめな」

「う、うん……」

またその隣でも

「ちせちゃん！！」（TOT）号泣！！

「ちせさ〜ん」同じく号泣！！

「お前ら、大の大人が大声上げて泣いてんじゃねえ！！」

ふゆみに娘を預け、元部下のところに来ていたテツであったが

「テツ二尉はいいすよ！！あんな美人の奥さんと、可愛い娘さんが居るんだから。」と、ナカムラ

「そうですよ、ちせさんは俺たちのアイドルだったんですよ？」とリョーヘイ

「結婚している人には言われたくないですよ。」と、名もないちせファンの自衛隊の男ども

「彼女欲しいよ〜」×全員

「うるせえ！！情けねえぞテメエら！！リョーヘイ、お前は確か彼女がいたんじゃないのか？ナカムラも好きな女がいるとか言っ

「それが聞いてくださいよ、テツ二尉。アイツに改めて告白したら、もう他に付き合ってるやつがいるって振られちゃったんすよ。」

「俺の方なんか、せつかく無事に帰ってきたのに、俺が死んだと思つて他の男と結婚してたんですよ。」

と、テツが（バカな）男共をなだめていると、タイミング悪く来てしまった……

「あ、の、テツ先輩。」

「おう、シュウジ。どうした？」

「いえ、ちせが戦争の時にお世話になった人たちに挨拶をしようと思ひまして。」

「なんかあつたんすか？」

そこには不穏な空気が漂っていたが、鈍感なシュウジが気付くはずもなく

「皆さん初めまして、ちせの夫のシュウジです。戦争の時はちせが大変お世話になりました。これからはちせと二人で幸せになるよう頑張つて行きたいと思ってます。これからも何かご迷惑をかける事もあるかもしれませんが、よろしく願います。」

普通ならここでみんなから祝いの言葉がかけられるだろう。そう、普通なら……

「あああ…… ああああああ……」

「うわあああああ！」

みんな泣きながら駆け出してしまった

「俺、なんか悪いこと言いましたか？」

「いや、お前は何も悪くない。安心しろ。」

「はあ？」

時を同じくして

「あつ、アケミ。」

「よゝ、ちせ。おめでとう。とっても綺麗だよ。」

「ありがとう、アケミ。これも、あの時アケミが告白を手伝ってくれたおかげだよ。」

「違うでしょ、ちせ。恋人になれたのはちせの実力！ちせが可愛かったからでしょや！」

「恥かしいよ、アケミ。」

「何言つてんのよ。あんた、高校ではそこそ人気あつたのよ？知らなかったの？」

「えゝゝゝ！知らなかった…」

「たく、これだからあんたは世話が焼けるのよ。」

「そういうアケミだって、アツシ君とはどうなの？仲良くやってる？」

「ふふつ、当たり前でしょや。もうすぐこの子も生まれるんだよ？ケンカなんかしてらんないよ。」

いとおしそうにお腹を撫でるその顔は、まさに『母親』の顔だった。

「そうだ、サトミも来てるんだった。」

「サトミちゃんも？」

「うん、その友達も来てるんだけど……、あつ、居た居た。おい、サトミ、イクちゃゝん、そんなところに居ないでこっちに来てみなよ。」

しばらくして二人がやってくる

「お姉ちゃんどうした……あつ！ちせさん……」

「うつ！……………」

「サトミちゃん、久しぶり。えっと、隣の子は……………」

「ああ、サトミの友達でイクちゃんっていつのよ。」

「そうなんだ。初めまして、イクちゃん。」

「は、初めまして……………この度は、ご結婚…おめでとうございます……………」

「ありがとう、イクちゃん。」

「ちせさん、私からもおめでとうございます。先輩と幸せになってくださいね……………」

「うん、ありがとう、サトミちゃん。きっと幸せになるからね。」
その一言が引き金となった

「うつう……………うわ……………ん！！」 人ごみの中へ駆け出すイク
「あつ、イク。待って…。たく、誰よ？イクに酒を飲ませたのは。」

相変らず酒癖の悪いイクだった。

ちなみに、酒を飲ませた犯人はというと……………

「うつうつうつ……………！！」

「あああつあつ……………！！」

「とうとうシユウジとちせちゃんも結婚か……………」

「アツシとアケミも出来ちゃった結婚しちまつたし、相変らず俺たちは彼女無し……………」

「オイ、それ以上言うな！！虚しくなるだけだ。」

「そうだな……………」

この二人がやけになって、偶然そばを通りかかったイクに絡んでワインを飲ませたのだった
するとそこへ

「あんたら、久しぶりにあつたと思つたら、なに暗い雰囲気だしてんの？せつかくの祝いの席なんだから、もつと楽しみなさいよ。」
突然、美人の二人組みに声をかけられた。

「あつ、あのどちら様でしょう？」

「僕たちあなたたちに会ったことありましたっけ？」

少なくとも、二人は本気で知らない人だと思ったが

「忘れちゃったの？私、セツコよ。」

「私はフミコ。あんたら、頭悪くなったんじゃないの？」

と、劇的？な再開を果たした四人が織り成す物語はまた別の機会に

.....

話は戻って...

泣きながら走っているナカムラとリョーヘイ。

同じく泣きながら走るイクと、それを追いかけるサトミ.....

『ドシンッ！』

「いつてえ.....」

「おい、大丈夫か、ナカムラ。」

「いたたた.....」

「ちよつと、イク。大丈夫？」

「あつ、ごめんね？ちゃんと前見てなかった.....から。」

「いえ、こちらこ.....そ.....」

「ナカムラ？」

「イク？」

ナカムラに駆け寄るリョーヘイ

イクに歩み寄るサトミ

二人もまた、運命の出会いをしたのだった（おいっ！）

結婚編 - 後編 -

「カンパ〜イ」カチンツ、チンツ。 グラスに満たされた液体が揺れている

今日は久しぶりに

俺とちせの家族に、アツシとアケミも揃っている

俺たちの結婚式が終わって今日で半年がたつ。偶然集まったみんなでお祝いをしていた。

……………はずだったのだが

「シュウジ〜飲んでるか〜?」

「キヤハハハハハハ! シュウちゃ〜ん。」

「ほら、どんどん飲みたまえ、シュウジ君!」

「ちせ〜? あなたもこっちに来なさ〜い。」

「オラオラ、シュウジ〜!! お前も付き合え〜!」

上から順に、シュウジの父、母、ちせの父、母、アツシ。もう見事に出来上がっている

そのとばつちりをもろに俺がくっていた……

「父ちゃん、明日も仕事あんだろ? もうそこら辺で止めとけ! あ

〜母ちゃんも酒弱いんだから。」

「ねえ、シュウちゃん。追加のおつまみ出来たよ。」

「おう!」

「あつ、シュウジ。私が運んどくよ。」

「ああ、いいって。そんな腹なんだから休んでろよ。」

アケミはもう予定日の一ヶ月前で、歩くのも大変そうだ。アツシのやつ、自分の嫁の心配ぐらいしてる!

「ごめんな〜、あんなダメ亭主のせいであんたらに迷惑かけちゃつて。後でキツク叱っとくわ。」

「ああ……」

そんなこんなで、夜も遅くなってきた頃にようやくみんなも落ち着いてきた

「なあ、シュウジ」

「ん？なんだよアツシ。」

「お前ら、まだ子供作んないのか？」

「ブーーーーッ!？」

「ゲホッゲホッ！何言い出すんだよ突然！」

「シュウちゃん、大丈夫？」

「ああ。でも、俺たちはまだ子供なんて……」

「「甘い!!」」

「うわっ!？」

「そんな考えは甘いぞ！シュウジ。」

「そうだ、シュウジ君！」

「ちよ、ちよっと、落ち着いて。」

「子供はいいぞ、シュウジ！」

「そうだぞ、シュウジ君。子供というのはいくつになっても可愛いもんだ。それに……」

「な、なんでしよう……」

「早く孫の顔が見てみたいからなあ。」

「そうだぞ、シュウジ。」

「そうよシュウちゃん。」

「ふふっ、ちせも頑張りなさいよ。」

「う、うん……」

「どうだ、シュウジ。人生の先輩達もこう言っているんだ。これでもまだなのか？」

「ちせ、あたしからもなんだけど、まあ好きな人の子供を身籠るって嬉しいことよ。」

「そうは言ってもな……」

「うん……」

問題はちせの体

いくら戦争が終わり、ちせが兵器として戦わなくてもいい時代になったとしても、体の一部は未だに兵器としての機能を保っている。性行為を行うには支障はなくても、それが結果に結びつかないつまりは妊娠することができない体だ

ちせとの結婚生活には何の不満もない。むしろ毎日が楽しいし充実している

でも、愛する人との子供が欲しい

これは、“生き物”としての本能だ。俺だって口には出さないが子供が欲しい、ちせだって同じ気持ちだろう

こればかりはどうすることも出来ない問題だった

苦い思いを残しながらも、こうして一日は過ぎていった

数日後

「行つてきまゝす。」

「行つてらっしゃい、シユウちゃん。今日は遅くなるんだっけ？」

「ああ、来週は試合だからな。そのことで色々と打ち合わせがあるんだ。」

「そう、頑張つてね。」

「ああ。行つてくる。」

そして家を出る

「あ、先生おはようございまゝす。」

「おう、おはよ。」

「シユウ先生おはよう！」

「ああ、おはよう。」

学生達と一緒に、この地獄坂を登る。

大学で教育学部に進んだ俺は、今年から母校で教師として勉強を教える立場になった

ちなみに、担当は数学で陸上部の副顧問もしている。まあ、顧問の

先生は何かと忙しい先生なのでほとんど俺が見ているのだが。

キンコンカンコン……

「よし、今日はここまで。最後の問題がまだ終わっていない者は宿題だ。次の授業までに終わらせとけよ」

「えー!?」

「えーじゃない。たった五問だろうが!ちゃんとやっておけよ。ほら、日直。」

「きりーつ、礼。」

やっと今日の授業が終わった

慣れてきたとはいえ、さすがに疲れる

だけど、次は部活だ。試合も近いから気を引き締めないとな
放課後になり、着替えて運動場に出る

ん?あそこにいるのは……

「テツ先輩!」

「おお、シュウジか。」

「どうしたんすか、先輩。急に学校に来たりして。仕事っていうか、
自衛隊って暇なんすか?」

「お、お前なあ……、なんか知らんが“上”に言われてな。今日は
お前に会いに来たんだよ。」

「俺っすか?」

「ああ、時間は…部活が終わってからでいいか。その時に話す。」
「はあ。」

そこでいい考えが浮かぶ

「そつだ、先輩。先輩も走っていきませんか?生徒達にもいい刺激
になりますから。」

「何言っただ、俺はもう陸上からは引退してるんだぞ。」

「毎日、自衛隊で訓練してるんでしょ。それに元オリンピック強化
選手じゃないですか。」

「バカ!それはマラソンじゃなくてバイアスロンのことだ!」

「ほら、覚悟を決めて。おゝいみんな、こつちに集合だゝ。」
「止めるゝゝゝ!!」

.....
「何だかんだ言つて、結構走れたじゃないですか。」

「何言つてんだおめえは。もうクタクタだよ。俺も歳かね。」

「先輩はまだ若いっすよ。」

「..... シュウジ。」

「はい。」

「俺が急に來た理由.....、分かつてるんじゃないのか？」

「..... はい。分かつているつもりです。」

「そうか。..... なら話は早い。軍上層部から、ちせ“一尉”に傳達だ。なるべく早いうちに軍に戻つて來い。それが命令だ。」

「俺に話していいんすか？」

「お前はちせの夫だろ？なら、お前も知つておいた方がいい。それに、このことはお前の口から直接伝えてやるべきだと思つてな。」

「..... 分かりました。ありがとうございます。」

「..... ま、頑張れよ。俺に出来ることはここまでだ。後はお前達が自分で何とかしろ！」

「はい。」

「じゃあな、シュウジ。」

「先輩も。」

先輩の歸りを見送つた俺は、すぐには動けなかった。

うすうす感ずいてはいた。

戦争が終わつて数年が経ち、世界は二度と過ちを繰り返さないため、様々な取り決めた。

復興が進まない土地への復興支援、国という枠組みを超えた国家間の協力、今まで隠してきた多くの情報の提示など、今まででは考えられなかった様な事が、平和に向けて動き始めた。

当然その中には、軍事力の縮小も入っている。

他の国にとって、未だに日本にいる“ちせ”は、二度と戦うことが

なくても脅威でしかないのだ。

自衛隊に戻ったちせが、どんなことになるか分からない
最悪の場合、機能停止……なんてことがあるかもしれない
足取り重く、家への帰路を歩いていた……

「おかえり、シュウちゃん。ご飯もう少しだから、先にお風呂でも
……、どうかしたの？シュウちゃん。」

「え？いや、なんでも……」

「なんだか悩んでるみたいだったけど。」

「あ、ああ。今度の試合のことで誰を選手に出すか、悩んでて……」
上手くごまかせただろうか？

「……そう？頑張ってねシュウちゃん。」

風呂を出た俺は、晩飯を食べた後すぐに寝てしまった。
結局その日、俺はちせに何も話すことは出来なかった

「次の日」

「いってきます……」

「いってらっしゃい、シュウちゃん。」

ちせは何も言わなかったが、俺はまだ昨日のことで悩んでいてほと
んど寝ていなかった。

どこかフラフラしながら学校に向かった

「……ん……い。」

「はあ……」

「せん……い。」

「ん？」

「先生！」

「ああ？藤崎か……どうした？」

「どうしたじゃありませんよ！ボーっとしちゃって、もう授業は始
まってるんですよ？」

「ああ、わりい。じゃあ、59ページの問題をやってくれ。」

「それは昨日の宿題じゃないですか。みんな終わってますよ。」

「そうだったか？じゃあ、次のページの練習問題やってくれ。はあ……」

「わかりました。（重症だな、これは）」

「はあ……」

こんな調子で、授業が進まない一日であった
今日もひとり帰り道を歩く

ただ、部活は休ませてもらった

こんな状況では何も教えることは出来ないからだ

「で？あんたらは何だよ。俺になんか用か。」

「私は、カワハラさんの後任に当たるものです。」

「おっさんの？」

俺の目の前には、護衛と思われる自衛隊を連れた人物が立っていた

「“ちせ一尉”には、話してくれましたか？」

「……………」

「その様子ではまだのようですね。では……」

「待てよ！！もう戦争は終わったんだろ？なら、もうちせのことに

かまうな！！ちせは兵器じゃねえ、俺の女房だ！」

「……………」。何か勘違いされてるようですね。」

「なに！？」

「軍勢力縮小のために、我々がちせ一尉の処遇について考えているのはお分かりでしょう。」

俺は黙って頷いた

「我々としても、他国には『ちせは軍を離れた』と言っているのですが、彼らはそれくらいでは信じてくれないのですよ。」

「……………」。

「彼らは、世界最強を誇る“ちせ”の力に怯えているんです。ちせが軍を離れても、それに变りはありません。」

「だからどうしたんだよ？ちせは何処にも行かせない。俺が守る。」

「それが、そうもいかないんですよ。」

「なに！」

まさかこいつら、無理やりにもちせを……

「危ないのはあなたです。ちせにとつて一番大切な物。それさえ手に入れてしまえば、ちせは手出しできない。要は人質ですよ。」

「俺が……狙われてるってのか？」

「……………」

「おい！何とか言えよテメエ！！」

「我々はこの事を伝えに來ただけです。どうかお氣をつけて。」

「おいっ！」

それだけ言つて自衛隊は歸つていった

「俺が……狙われている？」

戦時中監視されていたことはあつたが、今度はちせじゃなく俺が……
そこでふと思ひ出した――

最近、妙に誰かの視線を感じる。位置が変わっている机の上の荷物。生徒が目撃したと言う怪しげな外国人。

「まさか……」

キキィツ――

その時だつた。後ろの方から車が近づいてきて俺の隣で止まつた。

「キサマガシユウジダナ。ワレワレトキテモラオウ。」

「何！？」

車から降りてきた男がそう言つてきた

（危ない！逃げろ！！）

本能がそう告げていたが相手はそれを許しはしない

俺は、あつという間に車から降りてきた残りの奴等に囲まれていた
（クソツ！こいつ等に捕まったらちせが……）

俺は逃げようとしたが、突然足元のアスファルトが乾いた音と共に爆ぜた

いつの間にか、男達の手には銃が握られ、それが火を噴いたのだった
「オトナシクシテイレバキガイハクワエナイ。“チセ”ヲオビキダ

セサエスレバイイ。」

「ハヤククルマニノルンダ！」

「痛っ。」後ろから銃で小突かれた

（ちせを守るって誓ったのに、これじゃあちせに迷惑をかけちゃう。何とかしないと。）

しかし、何もできないまま俺はそのまま車に押し込められてしまった
「俺をどうするつもりだ！」

「ドウモシナイ。ワレワレハ“チセ”ヲヨビダセレバイイノダ。」

「こんなことしても無駄だ。ちせはもう軍と関係ない。もう戦うことなんか無いし、俺がさせない。」

「フッ。ソナコトハシッテイル。“チセ”ガタタカウコトハモウナイダロウ。」

「なら、なんで……」

「ソレガセイジトイウモノナンダヨ。」

「……………」

その一言がすべてを物語っていた。

いつまでたっても頭の固いやつ等は居なくなりはない。この人たちだって命令されてやっているだけだ。

しかし……

こんなやり方は許せない。

人質をとってちせを誘き出すなんて。

大体、こいつらは“ちせ”を甘く見てる。

俺を監視してたのなら、ちせがそれに気付かないはずが無い。

もちろん今、俺がこうしているのも気付いているかもしれない。銃を使ってしまったのだから。

キキキッッ！！

「！？」

「うわぁ！」

「ドウシター！？」

「マ、マエ……」

「アレハ……」

「アア、アア……」

車の前に居たのは

「……ちせ。」

そこには、あの頃のちせが立っていた。背中から羽を生やして。

「あんた達、シュウちゃんに何してるの？」

そう。この日本で、この街で、銃を使ってちせが気付かないわけがないんだ。

あのちせが。

「シュウちゃん。大丈夫？なんも酷いことはされてない？」

「ああ、大丈夫だ。」

「あんたら、どういうつもり？死にたいの？」

ちせがそう言うのと、リーダー格の男が前に出てきた

「ハジメマシテ、チセサン。ゴシユジンニシツレイナコトラシタノハオワビシマス。」

「あんた達、この街に何しに来たの？あたしの大切な人達に何かあったらただじゃ済まないよ。」

「オチツイテクダサイ。ワレワレハ、ベツニアナタチニキガイヲクワエニキタノデハアリマセン。ケイコクニキタノデス。」

「警告？なら、なんでずっと俺をつけてた。それにこんな事をする必要はないだろう。」

「フム。ソレハテキノメヲアザムクタメ。」

「敵って……、他にもいるのか？」

「トウゼンダ。“チセ”ノチカラヲホシガルモノハオオイ。ニドトタタカウコトガナクテモ、ゲンニコウシテマダ“チカラ”ハノコツテイル。」

男はそう言つてちせを指差した

「あつ……」

そこには、未だに羽を出したままのちせがいた

「キョウノトコロハコレクライデカエリマスガ、ワスレナイデクダ

サイ。アナタたちハセカイジュウカラネラワレテイルコトヲ。」

「お、おい！」

「アナタたちニノコサレタミチハスクナイ。デモ、アナタたちナラキツトイイミライヲキリヒラケルトシンジテイマス。」

「……………」

「キット、『カワハラサン』ガチカラニナツテクレルデショウ。」

「おっさんが？」

「カワハラさんが？」

今回のことはあのおっさんが一枚噛んでたのか
そして男たちは去っていった

「……………」

「シュウちゃん、カワハラさんに何か言われたの？」

俺は思い出していた。あの冬の時の事を

『「我々では、ちせさんに償おうとしても何も償うことはできません。ただ、遠くから見守ってあげるだけです。その時が来るまで…」」

「その時がくれば分かります。我々は、ちせさんが望んでいることなら、少しでもお役に立ちたいと思っています。あなたが我々を憎んでいても、それだけは忘れないでください。いつか我々の力が必要になるときが来ますから。」」
今が『その時』なのだろうか

そして家

「ねえシュウちゃん。」

「ん？」

「私ね、自衛隊に行こうと思うんだ。」

「おっ、おい、待てよちせ！」

「ごめんね、もう決めたんだ。」

「行くなよちせ。もうお前は戦う必要なんてないんだぜ。自衛隊に行ったりしたら何をされるか……………」

「シュウちゃん……………」でも、このまま逃げ続けても何も解決し

ないよ。それに今度こそシュウちゃんが危ないかもしれないし、私はそんなのやだよ。」

「うつ。」

「私、カワハラさんを信じてみる。きっと悪いようにはしてくれないよ。」

「で、でも……」

「私の大切な人が傷つくのは我慢できないの。だから私、自衛隊に行く。分かって、シュウちゃん。」

「ちせ……。」

俺の心も決まった

「……分かった、ちせ。行って来い。」

「シュウちゃん……。」

「ただし俺も一緒に行く。絶対に戻ってこいよ。」

「うん。」

「ちせに何かあったら俺も死んでやる。死んでもずっと傍にいてやるからな。」

「シュウちゃん……、ありがとう……。」

そしてちせは泣いた。俺の胸の中で、“涙”が枯れるまで。

そう、ちせはこんなにも人間なんだ。兵器なんかじゃない。

兵器は涙なんて流さない。こんなに暖かくない。こんなに柔らかくない。こんなに良い匂いなんかしない。こんなにも愛しいなんて思わない。こんなにも……

こうして俺たちは同じ布団で一緒に眠りについた

数日後

「お気持ちは決まりましたか？」

「はい。」

「ああ。行ってやろうじゃねえか、自衛隊に。」

目の前にはカワハラがいた

「つらい結果になるかもしれませんが？」

「でも、二人で決めたから。」

「ああ、俺たちは何処までも一緒だ。」

「そうでしたね、お二人を引き裂くことなんて誰にも出来ませんよ。じゃあ、行きますか。」

「その前に一つ聞いていいか？」

「ええ、どうぞ」

「ちせは大丈夫だろうな？」

「それは何とも言えません。今回のことは私たち“ちせ派”の者達が集まって見つけ出した、たった一つの希望といったところでし
ようか。」

「ちせ派？希望？」

「世界中にも“ちせ”を助けようという人たちがいるんですよ。こ
の間の人たちも私どもの仲間です。」

「そうだったんですか。でも、希望って……。」

「はい。戦争の時に資料のほとんどが無くなってしまったと思われ
てましたが、一部がディスクに保存されて残ってたんです。他にも
当時『最終兵器計画』に携わっていた者を探したりして、何と
かちせさんをその体から解放する術を探し出しました。」

「じゃあ、ちせは戻れるんですか？元の体に。」

「それは何とも言えません。理論上では可能ですが確率は低い。そ
れに、ちせさんの体がどうなっているのか、我々にもわかりません
から。」

「そんな……」

「シウちゃん。私なら大丈夫だよ、絶対に帰ってくるから。」

「ちせ……。」

「カワハラさん、よろしくお願いします。」

三人は車に乗り込んだ

「なあ、なんでちせにこんなに尽くそうとするんだ？」

「……以前言いましたよね、私の娘のこと。」

「ああ。」

たしか札幌空襲でなくなったとか

「ちせさんが娘のように思えて仕方ないんですよ。だからでしょうか……“娘”を救ってやりたいんですよ。一人の親として。」

「おっさん……」

俺の前にいるのは自衛隊の人間なんかじゃない、ただ一人の“親”だった

「さあ、研究所に着きましたよ。降りてください。」

「ちせ、頑張つてこいよ。」

「うん。絶対に戻ってくるから。んっ!？」

「んっ……………」

俺はちせにキスをしていた

「プハッ、シュウちゃん……。」

「帰ってきたら続きしような。」

「うんっ!」

時は流れ

一年後

「「オギヤー、オギヤー、オギヤー。」」

「おめでとうございます。元気な双子の赤ちゃんです。」

「ちせ、やったな。生まれたぞ。俺たちの子供だ。」

「うん、シュウちゃん。赤ちゃん可愛いね。」

「ああ、ちせに似てきつと可愛い子に育つぜ。」

「ふふっ。この子はきつとシュウちゃんに似てかつこよくなるよ。」

「ああ……そうだな。」

あれから、色々大変なことがあった。

ちせの体を治す途中、一時は機能停止までしてしまった

でも、ちせは俺の元に帰ってきてくれた。

こうして新しい命と共に

僕達は歩き続ける。ここから。新しい命と共に。

}
E
N
D
}

結婚編・後編・（後書き）

これでifのお話は完結です。

ちせとシュウジのもう一つの未来はどうだったでしょうか？

きっと二人がここまで来るのには、ここでは書ききれないぐらい様々な困難があつたことでしょう。

でも、二人は歩き続けます。二人が人間である限り。生き続ける限り。

とか何とかカッコいい事言いましたが、自分でもなかなかいい話になつたと思います。

ここで予告。次はif番外編です。

番外編では、ずっと書きたかつたことをやります。本編で語つていたシュウジとちせのささやかな未来の夢。

あれを實現したと思います。では、感想お待ちしています。

番外編〜未来の思い出〜（前書き）

< f o n t s i z e = 1 > 名前を考えてくれた方々 T h a n k s
!!

なお、このSSが読み終わったら、最彼第1巻のP193から読み直すことをお勧めします。 < / f o n t >

番外編　未来の思い出

教師A「シュウジ先生、今日は飲みに行きませんか？」

教師B「そうですね、たまにはみんなと一緒に行きませんか？」

教師C「せっかくお給料日なんですから行きましようよ。シュウジ先生って、あんまり飲み会に来ないんですもん。」

シュウジ「あの、俺は今日ちょっと……」

B「少しくらいならいいじゃないですか。遅くならなければ。」

教師D「おいおいお前ら、あんまりしつこく誘うなよ。先生は家で可愛い奥さんと子供が待ってるんだからよ。」

B/C「えー！？」

C「結婚されてたんですか！？」

B「お子さんも！？」

シュウジ「は、はあ。一応。」

D「まあ、君たちはこの学校に来たばかりだから、知らないのも無理はないか。なかなか可愛い奥さんなんだぞ。」

A「お子さんも双子の男の子と女の子の二人。」

D「しかも高校生の時に大恋愛をして結婚されたとか……。」

シュウジ「ちよっ、ちよっと！それ、誰から聞いたんすか！？」

D「ん」と、あっ、この間来てた自衛隊の人だよ。陸上部をすごしてた。」

シュウジ「自衛隊って……あっ！！」

テツ先輩だ……

このときシュウジは、後でテツにしかるべき制裁をする事を心に誓ったのだった。

B「うわーん！シュウジ先生のこと狙ってたのに。」

C「私だってー！！」

A「モテモテだな、先生。羨ましいぞ。」

シュウジ「はは……ははは……。」

とまあ、みんなには悪いが、今日も部活が終わってからすぐ家に帰ったのだった

「If」戦争が終わったら 番外編「未来の思い出」

「ただいま。」

玄関で靴を脱いでると、ドタドタと足音が聞こえてくる

子供1「お帰り、おとさん。」

子供2「お帰り。」

「ああ、ただいま。スグル、ツグミ。」

はあ。こうして子供の顔を見ると一日の疲れも吹き飛ばすから不思議だ

スグル「おつかれさま、おとさん。」

ツグミ「おつかれさま。今日ね、ようちえんでお絵かきしたんだよ。ね。」

スグル「うん。僕はね、おとさんの顔を描いたんだ。」

ツグミ「私はおかさんの顔。」

「そうか。じゃあ、その絵見せてもらおうかな。」

スグル「じゃあ、早くいこよ。」

ツグミ「いこ。」

「こら、引張るなって。」

ドタドタドタ…………

「おかさん。おとさん帰ってきたよ。」

「帰ってきた。」

「えっ！？もうそんな時間？」

「ああ、もうそんな時間だぞ、ちせ。」

「あつ、シュウちゃん！」

「ただいま、ちせ。」

「お、お帰り、シュウちゃん……。」

どうも歯切れが悪いな

「どうかしたのか？ちせ。」

「え！ど、どうもしないよ。」

「そうか？ならいいけど。」

「ほら、おとゝさん。見てみてゝ」

「見てみてゝ。」

「おつ、どれどれ。……おゝ、良く描けてるじゃないか。」

ご褒美に、二人の頭を撫でてやった

「えへへゝ。」

「えへへゝ。」

二人はご満悦顔だ

「ところでちせ、飯できてるか？腹減っちゃって。」

「そ、それが……」

「ん？どうした？」

「ごめんね、シュウちゃん。まだ……できてないの。」

「は？」

「ちよつと豪華な夕食にしようと思って作ってみたんだけど、煮込むのに時間がかかったちゃって……。それに、炊飯器のスイッチ入れるの忘れてて、ご飯もまだなんだ。」

おい、お約束かよ

「はゝ、そんなことだろうと思った。」

「え？」

「じゃあ、飯は後でいいよ。先に風呂入るから。」

「あつ！！」

「おい。どうしたよ……」

なんか展開が読めるけど

「お風呂のガス。まだ点けてない……」

「おいおい。」

あまりにもお約束すぎるぞ？

「おかゝさん、ご飯まだゝ？」

「まだ〜?」

「ご、ごめんね?まだ時間かかりそうなんだ。」

「え〜!お腹空いたよ〜。」

「空いた〜。」

とうとう二人がぐずりだしてしまった

「どうしよう、シュウちゃん?」

「どうするって……仕方ないだろ、たまには外で何か食おうぜ。今作ってるのは明日の分にしてさ。」

「でも、いいの?」

「ああ、どうせ今日は給料日だし少しくらいいいだろ。」

「やった〜、僕ハンバーグがいい!」

「私はねえ、ん〜と、ん〜と、ケーキ食いたい。」

「ほら、二人もこうして行きたがってるしさ。」

「おか〜さん、レストラン行こ〜よ。」

「行こ〜。」

こうして子供二人に迫られ、ちせもレストランに行くことに同意したのだった

そしてレストラン

「わ〜い、ハンバーグだ〜!」

「ね〜、ケーキは〜?」

「ケーキはデザートだから、ご飯が食べ終わってからね。」

「ほら、こぼすなよ〜。」

料理が来るまでは騒がしかった二人も、料理が運ばれてきてからは料理に釘付けだった

「ハンバーグ、美味しいか?スグル。」

「うん、おいし〜!」

「ツグミも美味しい?」

「うん、おいし〜!」

「ハハハハハ。」

……

……

……

「食べたらくつすり寝ちゃったな。」

「そうだね……。」

今は車に乗って家に帰る途中だった

「なあ、ちせ。今、幸せか？」

「うん、幸せだよ。シュウちゃん。いつも隣にシュウちゃんがいて、子供達がいる。怖いぐらいに幸せだよ。」

「そうか……。」

「でも、どうかしたの？」

「ん？ああ、俺も幸せだなと思ったからさ。」

「もう、シュウちゃんたら！」

「ハハハ。」

「フフ。」

そんな他愛もない話をしながら、俺は思い出していた。あの時の事を

「なあ、ちせ。ちょっと寄り道して行きたいところがあるんだけど、良いか？」

「あんまり遠くなければ良いよ。」

「大丈夫、すぐ近くだから。」

そして道を曲がり、坂を登って行った
山を目指して。

「ねえ、シュウちゃん何処に行くの？」

「ん、着いてからのお楽しみ。」

「え〜！」

「大丈夫だって、良い所だからさ。」

そして、さらに登っていく

周りは暗く、道も狭くなってきた

だけどどんどん進んでいった。

そして、ちせにも分かった。シュウジが何処へ行こうとしているのかを。

二人は、車を降り歩き始めた。あの頃のように

「……………」

「……………」

二人は何もしゃべらない

結婚して次の年くらいには、“ここ”は自衛隊の敷地ではなくなっていた。

道も、元は自衛隊が荷物運搬の目的でここを使ったため、舗装されていてここまで車で上がってこれるようになっていた

そう。ここは……

「綺麗だね、シュウちゃん。」

「ああ……………」

ここに来るのは、プロポーズをした時——ちせとシュウジが本当の意味で結ばれた時以来だった。

「ここに来るのも、久しぶりだねシュウちゃん。」

「ああ。」

「でも、なんで急にここに来ようなんて思ったの？」

「……………思い出したから。」

「え!?!」

「ちせは、忘れたのか？プロポーズの時——いや、二人一緒に敵から逃げようって約束した時のこと……」

「あっ！」

「俺たちが結婚しててさ、俺が家に帰ってきたらまだ飯が出来てなくて……」

「うん。」

「風呂もまだで、仕方ないから子供連れて外に美味しいもの食いに行つてさ……」

「うん……」

「そしてその後、この展望台まで来て……」

「うん……」

「あの頃、少しだけエッチなことしたよなって、笑つてさ。」

「うん……」

「おい、どうしたよ？泣くなよ、ちせ。」

「シュウちゃんだって……泣いてるべさ。」

「こ、これは……、目にゴミが入ったんだ！」

「フツッ。そういうことにしとくよ。」

「このっ！」

「ハハハッ。」

「アハハハハ。」

……

……

……

「あの頃は大変だったよな。」

「うん。」

「今でもさ、たまに思うんだ。あの時、ああしてたらどうなったんだろうって。もしかしてたら、地球は滅んでたんじゃないかって。」

「

「……シュウちゃん。」

「でもその反面、やっぱりなんでもなかったとも思えるんだ。こうしてちせと二人でいるとき、なんか、昔のことなんてどうでもよく思えるんだ。」

「……………」

「他の人から見たら、辛い事かもしれないけどさ、俺たちにとってあれが全てだったんだって。あんなことがあったから今の俺たちがいる。ここに居る……………」

俺はちせを抱き寄せた

「好きだ、ちせ。」

「私も。シュウちゃんのこと大好きだよ。」

二人は顔を近づけあった

「おとゝさん、おかゝさん、何してるの？」

「何してるの？」

「えっ！いや、別に何もしてないぞ！」

「う、うん。別になんも……………」

車で寝ていた子供が起きて来たのだった

「ふゝん。ねえ、ここってどこ？」

「どこ？」

「ああ、ここはな、お父さんとお母さんの思い出の場所なんだ。」

「うん。ここではね、本当にいろんなことがあったんだ。」

「えゝ！何があつたの？教えて教えてゝ」

「あつ！私にも教えて教えてゝ」

「いいけど……………長くなるぞ？」

「いいもん。おとゝさんとおかゝさんの話し聞きたいもん。なっ？ツグミも聞きたいよな？」

「うん。私も聞きたい。」

「ああゝ分かった分かった。じゃあなあ……………」

きつと今日のこの事も、いつか思い出として語るときが来るだろう

「お父さんとお母さんはな、一回ここで別れたんだ。」

「「え〜!〜!」」

あの頃の事を、今話しているように

「でもね、その後お父さんが、『これからふたりで、好きになってみねえ?』って言うてくれたんだよ。それでまた付き合うことになったんだ。」

「「うわ〜」」

だって、僕たちはこれからも

「うわっ!ちせ、てめえ、それは言わないでくれよなあ。」

「アハハハ……。」

恋していく……

生きていくのだから。

〜END〜

番外編〈未来の思い出〉（後書き）

< font size = 2 > まず、子供の名前はちびさんの「ツグミ」とユウさんの「優」（スグル）から選びました。ありがとうございます。

今回、Ifの本来の主旨に戻るため、ちょっとコメディー風味にしてそこからシリアスっぽくしてみました。

でも、二人の結婚生活……特に子供との生活が上手く想像できなかったです。なんせ“シュウジ”ですからね。普段が無愛想だけあって、子供に対してどんな態度をとるか……

意外と親バカかななんて思って、今までとはまた違った『父親』としてのシュウジを描いてみました。皆さんはこんなシュウジも好きですか？

あ、後日談のサクラちゃんの意味深な発言と、テツのその後はご想像にお任せします（笑）

最後までちゃんと読んでくださいね。 < / font >

後日談

ある一家の夕食後

「ねえ、パパ？」

「なんだ、サクラ。」

「あのね、サクラが生まれるよりも前に、パパと“ちせお姉ちゃん”が誰も居ないデパートでデートしたって、本当？」
ズルツ！

「サ、サクラ……それ、いったい誰から聞いた……？」

「んゝそれは教えられないんだ。約束だから。」

「約束って、パパにも教えられないのか？」

「パパも好きだけどゝ、乙女心は複雑なの（キャツ！）。」

「おい、なんだ、その乙女心って！」

「んゝ秘密。でも、否定しないってことは本当なの？」

「そ、それは……」

「ねえ、テツゝゝ。」

ビクウー！！

「な、なんだ？フユミ。」

「ちせちゃんとデートしたんだゝ。」

「い、いや、あのな？」

「しかも誰も居ないデパート？」

「落ち着けて、フユミ！」

「サクラが生まれる前ってことは、戦争中……それもちせちゃんが“女子高生”の頃よねゝ？」

「だから、それは……」

「あたしというものがいながら、戦争で何やってたんじゃー！！」
「うわゝゝゝー！！」

シュウジの復讐は、こうして成功していたのであった。

・本当にEND・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1315a/>

If...戦争が終わったら

2010年10月9日11時05分発行